International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

Extended essay cover

Candidates must complete this page and then give this cover and their final version of the extended essay to their supervisor.

Candidate session number			
Candidate name			
School name			
Examination session (May or November)	May	Year	2015

Diploma Programme subject in which this extended essay is registered: Japanese Group 1

(For an extended essay in the area of languages, state the language and whether it is group 1 or group 2.)

Research Question.

Title of the extended essay: 生の厳しさ,悲しさ,切なさを伝えるにあたり、作家は人物と状況設定にどのような工夫を施したか。

Title：芥川龍之介作「羅生門」「地獄変」「歯車」における人物設定の重要性.

Candidate's declaration

This declaration must be signed by the candidate; otherwise a mark of zero will be issued.

The extended essay I am submitting is my own work (apart from guidance allowed by the International Baccalaureate).

I have acknowledged each use of the words, graphics or ideas of another person, whether written, oral or visual.

I am aware that the word limit for all extended essays is 4000 words and that examiners are not required to read beyond this limit.

This is the final version of my extended essay.

Candidate's signature: Date: 27/1/15

Supervisor's report and declaration

The supervisor must complete this report, sign the declaration and then give the final version of the extended essay, with this cover attached, to the Diploma Programme coordinator.

Name of supervisor (CAPITAL letters)

Please comment, as appropriate, on the candidate's performance, the context in which the candidate undertook the research for the extended essay, any difficulties encountered and how these were overcome (see page 13 of the extended essay guide). The concluding interview (viva voce) may provide useful information. These comments can help the examiner award a level for criterion K (holistic judgment). Do not comment on any adverse personal circumstances that may have affected the candidate. If the amount of time spent with the candidate was zero, you must explain this, in particular how it was then possible to authenticate the essay as the candidate's own work. You may attach an additional sheet if there is insufficient space here.

For his extended essay, chose to analyze how authors use characters and setting to portray the sadness and pain of life. He focused on the works of Akutagawa Ryunosuke, namely texts from the beginning, middle and end of his writing career before his eventual suicide. It was challenging for initially when he undertook this project, as the abstract symbolisms of pain and sadness are hard to decipher through the use of characters and setting, however his personal experiences and keen determination to understand how the progression in Akutagawa's works mirrored his life gave him the determination to find deeper meanings. This has culminated in a thorough and well-researched analysis.

This declaration must be signed by the supervisor; otherwise a mark of zero will be issued.

I have read the final version of the extended essay that will be submitted to the examiner.

To the best of my knowledge, the extended essay is the authentic work of the candidate.

As per the section entitled "Responsibilities of the Supervisor" in the EE guide, the recommended number of hours spent with candidates is between 3 and 5 hours. Schools will be contacted when the number of hours is left blank, or where O hours are stated and there lacks an explanation. Schools will also be contacted in the event that number of hours spent is significantly excessive compared to the recommendation.

I spent 5 hours with the candidate discussing the progress of the extended essay.

Supervisor's signature: Date: 27 January, 2015

Assessment form (for examiner use only)

Candidate session number	

Criteria	Achievement level: Examiner 1	maximum	Examiner 2	maximum	Examiner 3
A research question	2	2		2	
B introduction	2	2		2	
C investigation	2	4		4	
D knowledge and understanding	2	4		4	
E reasoned argument	2	4		4	
F analysis and evaluation	2	4		4	
G use of subject language	2	4		4	
H conclusion	2	2		2	
I formal presentation	3	4		4	
J abstract	0	2		2	
K holistic judgment	2	4		4	
Total out of 36	21				

Name of examiner 1: (CAPITAL letters) _____ Examiner number: _____

Name of examiner 2: (CAPITAL letters) _____ Examiner number: _____

Name of examiner 3: (CAPITAL letters) _____ Examiner number: _____

IB Assessment Centre use only: B: _____

IB Assessment Centre use only: A: _____

Title

芥川龍之介作「羅生門」「地獄変」「歯車」における
人物設定の重要性

Research Question

生の厳しさ、悲しさ、切なさを伝えるにあたり、作家は
人物と
状況設定にどのような工夫を施したか。

Group: Group 1
Subject: Japanese A (Literature)
Category: 1

Exam session: May 2015

Character count: 7089 characters

要約

明治から昭和時代にかけて、多くの作家が様々な作品を出版した。その中で、私が最も関心を持った作家は、芥川龍之介である。彼の作品には、小説といえども、彼自身が色濃く投影されていると思ったからである。自身の中にある強い不安が、多くの作品の中に入り込んでいる。その中で私は、「羅生門」「地獄変」「歯車」の三作品を分析の対象として選んだ。

芥川の合計六十六にも及ぶ作品には、二つの大きな特徴があることに気がついた。一つは、初期、中期、後期といくに連れて、作品の内容が、大きく変わっていったことである。これはとても興味深い事である。二つ目の特徴は、時代や設定など作品の内容が変わっていったにも関わらず、登場人物の心情に変化が全く無かったことである。

私が選んだ、初期「羅生門」、中期「地獄変」、後期「歯車」の三作品には、生き方に迷った登場人物が描かれていた。これは、作家自身の迷った心情が作品に反映されていたのではないだろうか。芥川龍之介は、登場人物と状況設定にどのような工夫をして、生きる事の厳しさ、悲しさと切なさを伝えようとしたのか。

作者は、「羅生門」を描いた時から、人生に対する不安を抱いていたが、執筆数が増えていくうちに、その心情がさらに悪化してしまい、後期の作品「歯車」では自分をさらに追い込む結果となり、自身の心に根強く巣食う不安の心を抑えきることができずに、ついに自らの人生を終えてしまった。

（５９６字）

目次

要約……2

序章　芥川龍之介の人間像……4

第一章　「羅生門」を通して描かれる、生の厳しさ……5

第二章　「地獄変」を通して描かれる、生の悲しさ……7

第三章　「歯車を」通して描かれる、生の切なさと辛……8

終章　人物と舞台設定の重要性……9

参考文献……10

序章　芥川龍之介の人間像

芥川龍之介は、多くの短編小説を主に描いて、さらには新現実的主義でも有名であった。彼の人生は、作者としての順風満帆な暮らしをしたように見えるが、驚愕するような出来事や、結末で人生を終えてしまうのであった。一九八二年に東京都で、長男として生まれた。名前の由来は、彼が辰年、辰月、辰日、辰の刻に生まれたから、芥川龍之介と名付けられた。両親は、一般的な牛乳屋を営んでいた。だが、母親は彼が十一歳の時には、命を落としていた。

中学生から彼の才能は、他人より優れていて、高校は無試験入学し、大学は日本で一番でもある、東京帝国大学に進学した。そこで、さらに才能が開花し、二十人の卒業生の中で、二番目に優秀な成績を収めて卒業した。大学を卒業後、海軍機関学校英語教官を勤めた。そこでは、言語の教育に力を注いで、全体の指揮をとった。その後は、大阪にある毎日新聞社に入社して、新聞記者として働いた。十年後には塚本文との結婚をした。日本での仕事の成果を認められて、今度は海外視察員として、中国などのアジア近辺を、訪問した。

しかし、三十代後半に身体の衰えが見え始め、体がもの凄く弱り、病気にかかりやすい体になった。そのうちに、作品の数も減り始めた。後期になると、私小説的な傾向の作品を描いて、彼が人生に終止符を打つような内容が何度も唱えていた。そこでの代表作が、"歯車"や"河童"であった。これらの作品は、作者自身が文章に入って、彼の切ない人生を懸命に、説明していた。三人の子供に恵まれたが、精神的に追い込まれていて、家族との時間をあまり過ごせなかった。しかし、周りが見えなくなり、帝国ホテルで心中未遂事件を、起こしてしまった。その直後の七月二十四日未明、"続西方の人"を書き上げた後に、致死量の睡眠薬を飲んで自殺してしまった。三十五歳という若い、人生を終えるまでに、彼は何冊もの深い意味を込めた、作品を描いて彼なりのメッセージを伝えようとしていた。

彼の文章の描き方には、一種の特徴があった。三つの時代に分かれて、作者の主点が異なっていた。初期の作品、"羅生門"では、人間の内面やエゴイズムを出して、主に説話文学を典拠とした物のであった。中期の代表作"地獄変"では、芸術至上主義的な面が表現された。晩年で有名な"歯車"では、自分自身の人生を振り返ったり、生死に関する作品が多数見られた。しかし、作品の内容は変化して行ったが、全ての文章を通して、変わっていなかった心情があった。それらの心情というは、人生の悲しさや、つらさ、切なさや生きる事の厳しさを全面的に描いていた物であった。全般的には、もの凄くネガティブな表現や思考などが、描かれていた。私は、彼の文章の異なり方に、もの凄く興味を抱き、彼の文章をリサーチすることにした。さらに、読み進めると、人物と状況設定を主に、説明したいと思ったので、これらの大きな二つの点に注目したと思った。だから、羅生門、地獄変と歯車これら三つの作品を使って、どのように作者が、生きる事の厳しさ、悲しさ、切なさを表現するにあたり、人物と状況設定に工夫を施したのであろうか。

"或文豪の一生." *龍之介さんのプロフィール*. Akistu Maika, 25 Apr. 2013. Web. 13 Oct. 2014. <http://akitsumaika.com/ryunosukeprofile.html>
"或文豪の一生." *或文豪の一生*. Akistu Maika, 25 Apr. 2013. Web. 13 Oct. 2014. <http://akitsumaika.com/arubungonoissho.html>
"芸術その他／芥川龍之介のあらすじと読書感想文." *芸術その他／芥川龍之介のあらすじと読書感想文*, 20 May 2006. Web. 13 Oct. 2014. <http://www5b.biglobe.ne.jp/~michimar/akuta/015.html>

第一章『羅生門』を通して描かれる、生の厳しさ

舞台設定は、天変地異に襲われた、平安朝である。さらに、都自体が衰えていたので荒発していた。それから、羅生門の周りの雰囲気と、治安が悪くなり、盗人や悪人などが、町を徘徊するようになる。やがて、羅生門は死体で、埋め尽くされたのである。そこには、数日前に暇を出された、独ぼっちの下人が、羅生門の下で雨宿りをしていた。彼には、これから何も頼る物が無いのである。下人は、人生の不安を抱えていた。それは、生きて行くために、自分が盗人になる事に迷っていた。彼自身に或る勇気が全く無かったのである。しかし、恐怖心と好奇心が、下人の体を動かして、羅生門の梯子を登り始めた。羅生門には、一人の老婆がいて、その老婆に対して、大きな憎悪を感じた。彼女は、自分のかつらを作る為に、死体から髪の毛を抜いていた。彼女の行動を見ているうちに、彼に無かった勇気が生まれた。その後、彼の正義感は、エゴイズムに変化して、男は餓死しない為に、老婆を襲うことに決めた。彼女の着物を剥ぎ取り、闇に消えていってしまったのである。

原文と現代文は、同じ内容な文章であるが、数カ所に渡り異なった場面がある。まず、原文では、羅城門と記されていたことである。城という表現をしているので、街全体が栄えている感じで、文章全体で全く治安や、悪人が町中を散策しているとは、書かれていなかった。読者にも、全くそのような感じを与えなかった。住人が、羅城門に死体を運んでいるとは、書かれていなかったし、街全体が寂れている事が感じられなかった。しかし、羅生門では、生という漢字を使っていることから、一つの時代が終わり、新しい方向へと向かっている様子を想像できる。だから、作者はあえて町中を飢饉に襲わせて、治安が悪化して、悪人だらけの町にしてしまったのであろう。この状況を描く事によって、主人公の生きている感じを、生み出すことが出来る。これらの状況によって、町は崩壊状態に陥って、寂れてしまっていた。他の町から助けが無い限り、到底回復する兆しが、見えなかったのであった。時代が変化するにつれて、主人公の描かれ方が、全く違っていた。まず原文では、彼には名前が存在しなくて、男と呼ばれていた。彼は、京都の住人ではなく、摂津から盗みをするために訪れていた。彼の羅城門の目的は、他人から身を隠すためであり、なぜなら、自分は悪人だという事を理解していたからである。男と表現されているし、面皰が顔に露出していないので、青年では無くて、年配の方であると想像した。さらに、刀も所持していたことにより、決闘覚悟で、盗みに全てを掛けていた。彼には、全くの迷いも無かったので、目に見えた獲物を捕まえる覚悟が既に出来ていた。現代文では、主人公の名前は、下人という名で、独ぼっちで、数日前に主人から暇を出されたので、どこにも頼る場所が無かった。彼は、羅生門を雨宿りの役割で使用していた。彼は、青年だったという事が、面皰が顔にあるという表現で、理解できる。しかし、この文章では、彼の気持ちの変化が伺える。最初は、臆病者で、彷徨っていたが、盗人になる事に決意して、主人公のエゴイズムを精彩に表現していた。

芥川□之介.「□生□」.新潮文□.平成二十四年　六月五日
「今昔物語集」.「今昔物語集」の巻第２９巻第１８話.池上洵一, 2 May. 2010. Web. 13. Oct. 2014
<http://www5f.biglobe.ne.jp/~mind/knowledge/japan/konjaku006.html>

作者が、一番強調していた表現は、二つの作品の違いで、下人の気持ちの変換の瞬間であった。芥川が描いた作品では、主人公の下人は、意気地なしで、羅生門に登るので精一杯であった。そこには、死人の髪の毛を抜いている、全身が骸骨みたいで、痩せていた。その死人は、蛇を魚だと嘘をついて、商売していた女であった。先程まで、臆病者であった下人も、死人の髪の毛が一本ずつ抜けるのを拝見していると、恐怖心が少しずつ消えて行った。それと同時に、彼女に対する憎悪が、増してきて、悪に対する反感が、強くなってきた。その後、この老婆の生死が、自分の未来を左右することを、再確認した。老婆から、髪の毛を抜いている理由を聞いたら、この男に欠けていた、この世の中で生き延びるためには、盗人になるしかないという勇気であった。すでに、この男からは餓死という言葉は、頭から消えていた。文章を通して、分かるように下人の気持ちの変化は、彼がいた場所、出逢った老婆や、羅生門という新鮮な環境によって、臆病者から、勇気の漲った下人に変化したのであった。しかし、原文では下人の心情の変化は、全く見られずで、最初から盗人になる覚悟で、羅城門に現れて、彼には躊躇している様子などは、伺えなかった。

"Web マガジン." *Web マガジン*. 今昔物語集, 11 Jan. 2008. Web. 13 Oct. 2014. <http://www.geocities.jp/kimagurebito/sub31.html>

第二章『地獄変』を通して描かれる、生の悲しさ

この文章の時代は、平安時代であった。主人公は絵師をやっている、良秀という名前であった。彼は都で一番の腕前であった。だが、性格が最悪であった。自分の位は天より上で、自分のような偉い人間は、この時代に存在しないと決めつけていた。しかし、彼には親には似ていないほど、可愛らしい娘がいた。さらに、性格が極めて優れていたので、彼女は堀川の大殿の女御の身分として、屋敷に入る事になった。それでも、良秀は大殿に対しても不満が、積もり積もって、彼との関係が悪化してしまった。ある日のことであった、彼は、大殿から地獄変の絵を描くように依頼された。絵を描く時には、実際の物を目で見ることによって、描いていた。しかし、彼は奇人であったために、狂人な行動を繰り返して、他人を巻き込んでいた。例えば、弟子を天井からつり下げたりしていた。良秀は、大殿に対して、地獄変を描くに当たって、牛車が燃え上がっている所を、描きたいと申し出た。しかし、彼が見た光景は全く異なっていた。牛車には、自分の娘が乗っていたのであった。そのうちに、火が天下されてしまい、一瞬で牛車が炎に包まれていた。良秀は、親としての悲しみと、驚きを隠しきれなかったが、絵を描く為に、娘が死んで行く姿を見ていた。やがて、地獄変の作品が完成した。他人は、上出来さに驚愕していたが、娘を追う形によって、自殺をした。

原作である「宇治拾遺物語」の一節『絵仏師良秀』と芥川の『地獄変』を比べると、色々な所で、明確な異なった違いが分かった。二つの文章を通して、時代設定と舞台設定が、違っていた。原文では、仏様が出て来るので、随分時代を遡っていて、現代文では大殿と述べられているので、少し時代が新しくなった感じがする、雰囲気を出していた。舞台内容すなわち、文章内容は、完全に違って作品であった。現代文では、主人公の、良秀の一番の印象は、動物みたいな態度で、他人からは奇人呼ばわりされていたが、都で絵を描く腕が一番であった。唯一の家族は、娘しか存在していなくて、最後には、最愛の娘を無くして、生きる中での悲しみに直面して、自分を自殺するまで追い込んでしまった。原文では、娘の代わりに、妻子が良秀にはいた。しかし、この文章は絵描きだった彼の家は、火事のために、隣の家から、火が移ってしまっていた所を、外から笑いながら見ていた。もちろん、家の中には、妻子と仏様を残したままであった。最後の場面では、彼の思考はたくさんの家が火事によって崩れて行く所を見ていると、将来自分がもの凄い、儲けをすると決めつけていた。しかし、良秀自身の態度は、時代が異なっていても、あまり変化する事は無かった。皆も認めるように彼の絵に対する、才能は誰よりも優れていた。しかし、彼の性格は、恥知らずの、怠け者で、さらに強欲で、他人からは奇人呼ばわりされていた。彼の人柄は、動物の猿にそっくりだったので、猿秀とも周りの人から言われていた。原文でも、描かれていたように、彼は他人が苦しむ所を見ると、自分が一番強い物だと勘違いする。彼の妻子が、火に包まれて居る状況でも、自分の将来の事を想像していて、全く無関係な態度をとっても、平気なのであった。しかし、原文と現代文を比べて、彼にも感情に一つの変化が見られた。それは、妻子が死んで行っても苦しまなかった彼が、現代文で娘が牛車の中で、炎に包まれて亡くなって行くところを、見ているうちに、この良秀が生きる悲しさに直面した所であった。他人には、全くの興味を見せる様子が無かったが、唯一の娘には親としての、愛情が存在していたのであった。

芥川□之介. 「地□□」 岩波□店. 平成二十五年　二月十五日

「宇治拾遺物語」. 絵仏師良秀の解説. 古文集, 25 Jan. 2009. Web. 13. Oct. 2014 <http://manapedia.jp/text/index?text_id=1812>

第三章「歯車」通して描かれる、生の切なさと辛さ

「歯車」は、作家である"自分"を主人公扱いして幕が開けた。主人公が、友達の結婚式に出るために、電車に乗って東京へ向かっている時に、レインコートを着た幽霊の話を微かに聞いていた。その後、姿が似ているレインコートを着た、男性に遭遇して嫌に変な気分になってしまっていた。東京に着いた時には、めまいみたいな歯車の幻覚を目にした。それから、姪っ子からの電話があって、レインコートを着たままの義兄の死体が発見されたという連絡があった。主人公自身も精神が弱くて、精神病に通っていた。だが、普段通っている病院の道順を忘れたり、レインコートを着た妙な男を見かけたりした。その後、彼の身の周りにある物全てに対して、妙な因縁を感じていた。だから、睡眠薬を使って生活をしていた。彼は一日中部屋にこもり、色々な作品を書き上げていた。しかし、彼の精神状態はどんどん悪化して、自殺の事を考え始めた。数日後、実家の家に帰って来てが、今まで以上の恐怖と苦痛に襲われて、自分の死が迫っている事を感じ取って、終わってしまうのであった。

「歯車」は、昭和時代に作者が自殺する前に、描いた一作品であった。作者は、登場人物を自分に当てはめて、人生の中で、つらさや切なさを書き出していた。主人公は、文書の前半から、物事を奥深く考えすぎて、妄想に走ってしまい、不安になっていた。文章中に、何回もレインコートの姿を人に遭遇していたが、彼の頭の中で妄想をしていて、幻覚の症状が起こっていていたと、予測できる。なぜなら、主人公はレインコートの気配を、あまり感じる事が、できなかったからである。さらに、寒中の季節外れに、レインコートがいるわけないからであった。だから、彼は何らかの恐怖心を物に抱いていたからであろう。自分の体全体は、痩せ細っていて、実の姉からも軽蔑されて、彼はもの凄く惨めな思いして、一人で切なく孤独な人生を歩んでいた。普通の人間との会話はできるが、病的な破壊欲を覚えてしまって、一人で牢獄なようなホテルに、静かに過ごして暮らしていた。この頃には、彼は医者からも不眠症と診断されて、薬に頼る事によって、毎日を過ごしていた。彼の頭の中には、死を待つだけだと理解した上で、苦しみながら、文章を書く事に専念していた。一番彼が苦しんでいた病は、右目奥に出来る、歯車のような物であった。彼は、この病に支配されて、激しい頭痛まで覚えてしまって、幻覚を起こす一つの原因でもあったと考えられる。自分の実の親まで、精神病院に通っていたので、家族を全員を含めて、全員が精神的に弱い傾向で、日々を過ごしていたのであった。彼は、母親の弱い所も見てきた事により、自分も彼女のような状況に直面したくないと、必死に人生を過ごして来ていたであろう。最後は、自分の自宅に帰宅したが、自分の人生は短い事を承知の上で、精神病へ行くのを諦めた。彼の最後の言葉は、"文章を描く力さえ残っていなくて、誰かに殺して欲しいと思っていた"。結局は、彼は最後まで、一人で孤独な生活の中で、苦しみ続けて、切なく人生を終えてしまっていたのであった。彼が生きている中で、生きるつらさを右目の奥に出来る歯車と、不安に毎日を過ごして行く事によって、上手に表現していた。

芥川□之介.「□□」岩波□店.平成二十五年　四月五日
芥川□之介.「□□」岩波□店.平成二十五年　四月五日
芥川□之介.「□□」岩波□店.平成二十五年　四月五日

終章　人物と舞台設定の重要性

芥川龍之介が描いた短編小説は、色々な技巧、独特な優しい言葉、芸術風格、細かい心理描写を通して、人間の思想意識を反映させようとしていた。これらは、彼自身の持っている魅力であり、さらに巧みに使って、彼は昔の社会の現実を書き出していた。そこには彼だけが持っている、特徴がもう一つあった。分析後、彼の特徴が分かるように、初期、中期、後期に渡り内容が大きく変わっていった。初期では、人間の内面やエゴイズムを出し、主に説話文学を中心とした物のであった。中期になると、芸術至上主義的な部分を全面的に出していた。晩年では、自分自身の人生を振り返り、自殺の経緯まで説明した。さらに、生と死の瀬戸際に関する内容や、薬の力に頼ってしか生きられなかった、自分を描いた。

心情の部分では、全ての文章を通して、変化があまりなかった。それらの心情というは、人生の悲しさや、つらさ、切なさや生きる事の厳しさであった。羅生門では、下人の私生活がとても過酷な状況で、何も頼る物が無くて、生きる厳しさに直面した。地獄変の良秀は、自分の最愛の娘を自分の絵を書いている前で、亡くなってしまって、人生で最悪の出来事と、悲しみの壁に打ち当たった瞬間であろう。最後の、歯車では作者が主人公になり、自分自身の死が近づいている事を察して、人生の切なさや苦しみを明確に描いていた。全般的には、もの凄くネガティブな表現や思考などが、三冊を通して使われていた。これらの三冊を通して、作者は特に人物と状況設定に工夫を施して、生きる厳しさ、切なさ、悲しさを伝えていた。羅生門では、原文と現代文の違いを示して、主人公下人の気持ちの変化に特徴があった。現代文では、彼の飢死したくないという恐怖心から、或る一つの勇気に変化する、場面が上手に描かれていた。彼の状況は、罪を犯してまでも、生きてゆくという運命であった。だから、彼は主人に暇を出されて直後に、生きる厳しさを味わっていた。さらに、彼のいた舞台設定は、天変地異により、町は崩壊の寸前であったために、彼はもっと苦しい運面に直面するのであった。地獄変では、主人公の絵師を使って、彼が直面した生きる悲しみを描いていた。彼が、最終的に娘の重要さに気づいて、死んで行く姿を見た時に、彼は家族の温もりを感じたのであろう。なぜなら、原文では、妻子が存在していたが、彼女が家の中で炎に包まれていたが、彼は笑いながら自宅が崩れて行くのを、拝見していた。だから、現代文では、作者があえて彼を地獄に落とすような形で、娘の死を描いたのであろう。最後の歯車では、文の最初から最後まで、作者が自分自身を文の中で描いていた。彼は、精神的に追い込まれていて、数回に渡って自殺を考えている感じがする言葉を述べていて、作者として生きてゆく中で、つらさや切なさを描いていた。

芥川□之介.「□□」岩波□店.平成二十五年　四月五日
芥川□之介.「地□□」岩波□店.平成二十五年　二月十五日
芥川□之介.「□生□」新潮文□.平成二十四年　六月五日

参考文献

「羅生門」
著者　芥川龍之介
発行所　新潮社
八十二刷発行　平成二十四年　六月五日

「地獄変」他７篇
著者　芥川龍之介
発行所　岩波書店
一刷発行　平成二十五年　二月十五日

「歯車」
著者　芥川龍之介
発行所　岩波書店
五十五刷発行　平成二十五年　四月五日

A 2
B 2
C 2
D 2
E 2
F 2
G 2
H 2
I 3
J 0
K 2

21